

妊娠中の女性医師をサポート！

医師用マタニティ白衣を開発



今回開発された白色の医師用(右)と水色の薬剤師用の二種類のマタニティ白衣を披露。ボタンホールやバックルによる調整ベルトでウエストまわりの大きさを変えことができる=島根大学医学部本部棟

妊娠中でも快適に着られる白衣を―慢性的な医師不足が横たわり、女性医師の定着化が課題の一つとなる中、島根大学医学部ワークライフバランス支援室(出雲市)と大東白衣(雲南市)、日昇産業(広島市)の共同研究で、医師用マタニティ白衣がこのほど開発された。医師用マタニティ白衣の開発は全国初のもので、将来的な全国展開も視野にさらに改良を重ね、来年度をめどに市販化を目指したいとしている。

島大医学部(出雲)
大東白衣(雲南)
日昇産業(広島)

全国初 来年度めどに市販化目指す

従来から看護師用のマタニティ白衣は市販されているが、衣服の上にはある医師用のコートタイプのマタニティ白衣はなく、妊娠中の医師はお腹が大きくなると白衣の前ボタンを数個外して着たり、男性用の大きなサイズを着てのしごとという不便を強いられてきた。そんな中、昨秋、島根大学医学部附属病院内の妊娠中の医師から、医師用マタニティ白衣に関する相談があったことを受け、開発に向けた検討作業を開始。今年二月から産学連携での取り組みが始まり、学内の妊娠中の医師に試着を依頼し、修正や調整を重ねながら試作品の製作を進めてきた。こうして完成した医師用マタニティ白衣は、妊娠中の体形の変化に

応じ、ボタンホールやバックル(留め金)がついた調整ベルトでウエストまわりの大きさを変えられることができ、妊娠初期から産休直前まで着用が可能。全体的にすっきりとしたフォルムに仕上がっている。生地は、吸湿・速乾に優れ、透けにくい、しわも寄りにくいポリエステル100%の素材を使用。島根大学名で特許も出願している。十六日には島根大学医学部本部棟で、開発にあたった同ワークライフバランス支援室や、大東白衣、日昇産業の担当者らが臨席し、経緯などを説明。その後、今回開発されたマタニティ白衣が、実際に着用した状態で披露された。今回披露されたマタニティ白衣は、白色の医師用と、水色の薬剤師用の二種類。モデルになった医師の仲田典子さん(29)は「妊娠九カ月目にはデザインがすっきりしていてお

腹が目立たず、見た目もいい」、同じく薬剤師の三浦佳江さん(29)は「妊娠八カ月目には、(通常のものでは)お腹がパンパンの状態だった。マタニティ用だとお腹まわりの着心地がいい」と、実際に使用した感想を話した。今後、さらに学内外の医療職を中心にモニターを募集し、使いやすいなど、実用化に向けての改良を重

ねる考え。島根大学医学部産学連携センター地域医学共同研究部門の中村守彦教授は、「いろいろな場面に応じたものをラインナップし、販売にこぎつけたい」と話す。島根大学医学部附属病院の小林祥泰院長は「島根大学医学部ではワークライフバランスを重視しており、妊娠した医師が少しでも気持ちよく病院の中を歩けるものを開発する」とは、本人にも周りにも意義がある」と指摘。ワークライフバランス支援室の内田伸恵室長は、「若い世代の女性医師が増えており、女性を働きやすくする工夫が、マンパワーを高め、医師不足の解消にもつながっていく。医師用マタニティ白衣はある程度学内に用意し、一定期間レンタルできる体制をとってほしい」と話している。島根大学医学部・附属病院では、研修医や医員など若手医療職の女性比率が四五割程度を占めており、医師用マタニティ白衣の利用対象数の参考となる昨年度産前休暇取得数は十五人に及んでいる。